

カトウコレノブ 加藤惟寅 通稱莊介、初め宇右衛門。蘭山と號した。寶永二年父重長の後を襲ぎ、四百石を賜はり、綱紀以下七侯に歴仕した。天明二年秋歿、年八十二。惟寅讀書を好みて大地昌言に従遊し、蘭山私記の著がある。

カトウゴンベエ 加藤權兵衛 貞享四年前田綱紀に召出され、新知百五十石を受け組外に班し、元祿七年出銀奉行に任じ、寶永元年二月歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

カトウサトアリ 加藤里有 通稱采女。寛政六年養父里直の後を襲ぎ、幼にして三分の一を領したが、享和二年に至つて本祿千五百石を襲いだ。文政四年薪藏火消役となり、天保七年假に經武館督學を攝し、亦明倫堂の事に興り、十一年先簡頭に轉じたが督學故の如くであつた。弘化二年八月十九日五十八歳を以て歿。

カトウサトシゲ 加藤里重 小字は三平、後に大炊助・石見・又五郎・左衛門・圖書と稱した。尾張に生まれ、六歳の時父に従うて加賀に徙り、前田利長に仕へて祿八百俵を賜はり、近習となつた。次いで大聖寺の役に出陣して功を立て、慶長七年父の歿後三千石を襲ぎ、人持組に列し、十九年大坂の役に奮闘して創を受け、後の役に亦敵將と合槍して傷つき、圖書丸に入つて式臺に放火した。寛永十八年江戸留守居役となり、萬治二年二月歿、年八十。

カトウサトミチ 加藤里路 幼名喜久松、後に修理・圖書。號は推の屋。天保十一年十月金澤に生まれ、弘化二年父里直の後を受けて千五百石を領した。里路歌道を符合竹柄に學

び、維新の後金澤藩宣教掛・神祇官宣教使・白山比咩神社宮司・射水神社宮司・氣多神社宮司等に任ぜられ、晩年金澤に歸り、興道社を起して國學を講じた。四十四年二月歿、享年七十二。惟の葉二十餘卷の遺稿があり、加藤家祖傳・神木記・尾山神社編年要誌の著もある。

カトウザン 火燈山 ↓ヒトモシヤマ 火燈山(江沼)。

カトウシゲカド 加藤重藤 初め市左衛門、後宗兵衛・石見。父は圖書助順光。重藤初め織田信長に仕へ、柴田勝家に屬して勝山城を守つた。主家滅亡の後丹羽長秀に屬し、天正十三年佐々成政の請に應じて富山に赴く途上、松任に於いて前田利長に仕へ、次いで金澤に徙つて祿六千俵を受けた。慶長五年大聖寺攻城の際旗奉行となり、功によつて五百石を加へられ、計三千五百石を領して人持組に列したが、七年金澤城火災の時火藥庫破裂の爲に創を受け、翌年正月十二日遂に歿した。

カトウシゲズミ 加藤重澄 重藤の二男。一諱は重政。幼名宗七、後宗兵衛と稱した。慶長四年前田利長に仕へて、三百石を賜はり、翌年大聖寺の役に從軍し、七年父の遺知の内五百石及び兄里重の四百石を受けて前祿を召上げられ、元和大坂の役に從軍して重創を被り、翌年功を以て百石を加へ、計千石となつた。慶安三年歿、年六十六。

カトウシゲハル 加藤重治 通稱與市郎。圖書里重の子。萬治二年配分知四百石を受け、御馬廻に班し、寛文元年大小將に轉じ、延享四年役銀奉行に任じ、天和二年また御馬廻となつて役儀を免ぜられ、休閑と號し、八十一歳を以て元祿五年に歿した。その子彌市右衛

門里喬、初名松之助嗣ぎ、元文六年八月九日七十八歳を以て歿し、跡目を願はずして家斷絶した。

カトウシゲユキ 加藤重之 字は子厚、號は謙光齋、十左衛門と稱した。父重次の二子。里重の歿後、其の祿三百石を割いて賜はり、前田綱紀に仕へて馬廻組・大小將組に列し、延寶元年大小將横目となり、持弓頭・持簡頭を歴て、元祿三年槍奉行に進み、九年百五十石を加へ、計四百五十石を受けた。正徳三年歿。年七十九。

カトウシヨウゲン 加藤將監 加藤氏は能登の長氏累代の家士であつた。享祿四年朝倉宗滴が加賀に兵を入れた時、長英連は之に應じて津幡に向かうたが、一向一揆の爲に敗れ取り、將監は十一月二日戰死した。その子將監も永祿二年三月二日羽咋郡佛木の戦に亦死し、更にその子の將監は若名を紀三郎というたが、慶長十五年正月十七日七十八歳で歿した。その裔に采女があり、寛文十一年長尚連が幼にして家を襲ぐに及びその傳となり、子孫相傳いで藩末の時に及んだ。

カトウズシヨアゲチマチ 加藤圖書上地町 元祿九年の地子町肝煎裁許附に、折違町・廣岡町・加藤圖書上地町と載せてある。此の地は山王道から折違橋へ出る小路の間で、後に圖書町と呼んでゐたが、明治四年四月戶籍編成の時折違町に歸した。

カトウセイザエモン 加藤清左衛門 享保三年奥村伊豫守の興力として召出され、二百石を領し、寛保中組外に列し、寛延三年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

カトウタケサト 加藤武里 通稱準之助。次郎左衛門。初諱嘉喬。天明三年父治兵衛の遺知二百石を受け、表小將に任じ、寛政二年七月五十石を加へ、御使番・物頭並に歴任し、文化四年十一月朔歿した。

カトウトウベエ 加藤藤兵衛 白山山麓の諸邑は、白山權現の御庭所たるを以て、元來領主を戴くことがなかつたが、室町の頃から牛首の土豪加藤藤兵衛といふ者擧頭し、附近土民を屈服せしめて恰も統治者の如き觀を呈した。然るに永正中藤兵衛は土寇の爲に戮せられ、その子三郎助十一歳にして逃れて島村の尾屋孫左衛門に養はれたが、後石川郡福岡の城主結城宗弘に隨從して、諱を則直と稱し、大永元年宗弘の援を得、土寇を驅逐して牛首を回復した。

カトウトウベエ 加藤藤兵衛 明暦元年白山々麓尾添村民が領上神祠の袖取を行はうとした時、牛首の郷長加藤藤兵衛は、牛首・風嵐二村民と共に之を妨害した。この爭議の結果、牛首等は寛文八年を以て幕府領に歸したが、藤兵衛は從來種々の私曲があつた廉で、同年公儀から追放を命ぜられた。この藤兵衛追放の理由を、明谷川から用水を引いた時、その費用支へなかつた爲、貢米を割いて之に當てた爲であるとする説もある。けれども、この用水の今年號壁といふ岩壁には文字が鑿られてゐて、甚だ不明瞭ではあるが、『元和元年□月吉日か藤と兵へ建造花押、かと□藏花押』と讀めるから、初めて掘鑿したのは先代の藤兵衛であらう。しかし後の藤兵衛がその用水の疏通等に關係して何等かの私曲がなかつたとも言はれない。

カトウトキヤス 加藤時隆 通稱九八郎。

カトウトキヤス 加藤時隆 通稱九八郎。

カトウトキヤス 加藤時隆 通稱九八郎。

カトウトキヤス 加藤時隆 通稱九八郎。

カトウトキヤス 加藤時隆 通稱九八郎。